

二〇二〇年度バルトン忌記念講演（2）

「三人のバートン、二人のドイル」

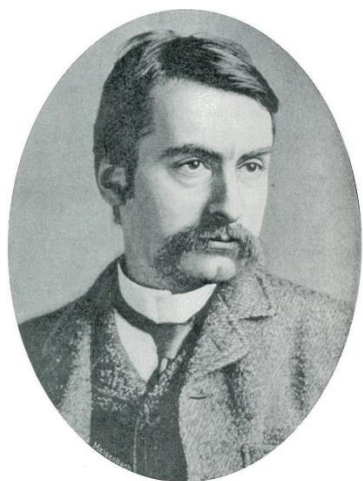
田中 喜芳

ただ今ご紹介頂きましたシャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes)、コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle) 研究家の田中喜芳でございます。本日は三〇分という短い時間ではございますが「三人のバートン、二人のドイル」と題しまして、日本と台湾の両国で上下水道の父と称されるウイリアム・キニモンド・バートンと彼の幼馴染で名探偵シャーロック・ホームズの作者、アーサー・コナン・ドイル、そして、二人を支えた人たちのお話をさせて頂きたいと思っています。

お話にはメアリーとかドイルとか同じような名が前回出てきて混乱してしまいましたが、誰のことか区別がつくように、臨機応変に使い分けながらお話を進めさせて頂きたいと思っています。

バルトンと呼ばれるようになった訳

日本では「バートン」ではなく、なぜ「バルトン」と呼ばれるようになったのか、それから始めたいと思います。それは、彼が衛生工学の教授として来日した明治二〇年、西暦で言えば一八八七年五月三〇日付の「官報」に記載され



ウィリアム・キニモンド・バートン



アーサー・コナン・ドイル

ている名前の表記に原因があります。こうです。

「外国教師 帝国大学医科大学教師独逸人ヨゼフ、ヂスセハ去ル二十六日雇満期ニ付解約セシヲ以テ直ニ帰国ノ途ニ就ケリ又帝国大学工科大学衛生工学教師トシテ英国ヨリ招顧セルダブリュー、ケー、バルトンハ同日、来着セリ
(文部省)」

これは、当時の文部省の役人が、バートンの先任教師がドイツ人であったこと、また、苗字のスペルだけを見て単にドイツ風に「バルトン」と思いこみ、今ご紹介したような文章を「官報」に書いたことが原因と思われます。そして、バートンに会った日本人が皆「バルトンさん、バルトンさん」と呼び、バートン自身も「自分の名前はバルトンではなく、バートンだ」訂正しなかったことから、日本ではこの「バルトン」

が定着してしまったという話が伝わっております。

本日は、本来の呼び方「バートン」、あるいは単に「ウイリアム」などと呼びたいと思います。

水理学

さて、冒頭、私はシャーロック・ホームズの研究家だと申しました。ホームズといえば、その卓越した「推理力」で難事件を次々と解決するのが彼の魅力、物語の醍醐味にもなっております。私たちシャーロック・ホームズの熱キアン」とは「シャーロック・ホームズの熱烈ファン、または研究者」を指して「シャーロックキアン」と呼んでおりますが、その、シャーロックキアンの間では、ホームズは彼独自の卓越した推理を、単に推理方法から「推理学」にまで高めた人物だと言うのが定説になっており

ます。

英国の作家、コナン・ドイルが書いた全六〇編のホームズ・シリーズ、いわゆる「ホームズ物語」は、今日、これまで一〇〇以上の言語に翻訳され、世界で二三〇年以上に亘って愛読され続けております。そして、シリーズを連載致しましたのが、この「ストランド・マガジン」です。因みに、これは一八九一年九月号で《花婿失踪事件》が掲載されております。

また、これは台湾で五〇年前に出版された「ホームズ本」です。中のイラストから《青いガネット》《ブナ屋敷》が収録されているようです。きつと台湾にも多くのホームズ・ファンがいるのでありましょう。謝代表様も一度はシャーロック・ホームズの名前は耳にされたことがあるのではないのでしょうか。

私は長年ホームズの研究を続けておりますが、じつは私が大学時代に研究致したのは

シャーロック・ホームズの「推理学」ではなく、同じ発音ながら全く異なる、水の流れを研究する方の理学「水理学」でございました。粟津清三教授の研究室で跳水の研究をしておりました。

横浜の水

もう一つ、冒頭から私事続きで恐縮ですが、私は生まれも育ちも横浜でございます。横浜といえは幕末の開国以来、日本でもいち早く外国に門戸を開いた港町であり、子どもの頃から「横浜の水は美味しい」えに長持ちする。だから横浜港に入ってくる外国の客船は、たとえば飲み水が残っていても横浜港に入るとそれを全部捨てて、横浜の美味しい水を買って積み込んだものだ」と周囲の大人たちから、そう聞かされておりました。また、横浜には昔「水売り」などという商売もあったそうです。そんなこと

から、小さい頃から横浜の「上水道」には誇りと同時に興味を持っておりました。

今、思い返しますと、「バートン」の名前を初めて聞いたのは、今から約半世紀前、土木工学科の学部時代の頃であったと思います。人々を感染症などの病気から守るために「清潔な水」がどんなに大切かは、小学校の授業でもたびたび聞かされて知っておりました。

私が子どもの頃、つまり一九六〇年頃のことですが、横浜の小学生たちは市内にある浄水場、一九一五年（大正四年）創設の「西谷浄水場」には、必ず全員が施設見学で訪れておりました。ですから大学では谷口清治教授の「上水道工学」の授業は、毎回、興味深く聴いておりました。

「上水道工学」の講座では、東京都葛飾区にあります「金町浄水場」の施設見学が恒例となっておりました。その時、現場で谷口先生が日本の上下水道の父として「バートン」の話をし

て下さったのが、私が「バートン」の名前を聞いた最初と記憶しております。

「ホームズ物語」と出会う

一方、私が「ホームズ物語」に初めて出会ったのは高校二年生の時でした。以来、ホームズや事件の背景になったウィクトリア朝の英国にも興味を持ち、さらに、作者 Doyle まで手を広げて研究して参ったのでございます。今年で六七歳ですので、ホームズの研究を始めて丁度半世紀が経ちました。

後年、名探偵ホームズの生みの親アーサー・コナン・ドイルと、日本や台湾でも上下水道の父と言われるバートンが、じつは幼馴染で、終生の友達であったことを知ったときの驚きと感動は今でもはつきりと覚えております。人生における「出会い」の大切さと不思議な縁を感じた瞬間でありました。

もし、今日まで二人の研究をしてこなかったら、ここで皆様にお目にかかることもなかったと思うと、本日の皆様との出会いはバートンと Doyle のおかげと感謝しているところでございます。前置きが長くなりました。それでは本題に入らせて頂きます。

Doyle がリバトン・バンク・ハウスに預けられた訳

本日の主役は W・K・バートンですが、話の都合上、まずはアーサー・コナン・Doyle の方から話を始めさせて頂きます。アーサーは一八五九年五月二二日、スコットランドの首都エジンバラで、Doyle 家の長男として誕生しました。

アーサーが三歳だった一八六二年当時、一家はエジンバラ郊外のまちポートベロに住んでおりました。父チャールズの職業は王立建設院

に務める建築職の公務員だったのですが、本来は画家志望でした。そこで何度も公募展へ応募しましたが認められず、やがて、失望感から飲酒が激しくなり、その年の末頃には床に寝そべり、自分の名前さえ言えないほど深刻な状況に陥ってしまったといえます。

その四年後、一八六六年から二年間、七歳になったアーサーは※ニューイントン・アカデミーという塾のような学校に通学するとの理由から、メアリー・バートン（一八一九・一九〇九）の家、リバトン・バンク・ハウス（RBH）に預けられることになりました。アーサーが預けられた本当の理由は、もちろん、アルコール依存症の父親から少しでも彼を離しておくことだったのはいうまでもありません。



改築前のリバトン・バンク・ハウス(RBH)

※現在のニューイントン・ロード三番地（当時はアーニストン・プレイス八番地）。RBHからは約一キロで子どもの足でも十分に通えた。

ところで彼がリバトン・バンク・ハウスに預けられるようになった経緯とは、一体、どのようなものだったのでしょうか。アーサーの母メアリー・フォーリーと、メアリー・バートンは何処で出会ったのでしょうか。英国におけるドイル研究の権威アンドルー・ライセツトは次のように説明しております。

夫チャールズのアルコール依存症が益々ひどくなり役所へも行けなくなると、当然、ドイル家の経済状況は苦しく、家庭内の雰囲気も暗いものになってしまいました。そこで、見かねた知人たちはチャールズを施設に入院させるようメアリーに忠告したのです。まだ二〇代だったメアリーの不安はいかばかりだったでしょう。

カトリック教徒としてメアリーの信仰心は厚いものでしたが、母親の死と夫の精神病院への入院、それに続く二歳になったばかりの娘の



メアリー・バートン



メアリー・ドイル 1891

急死など、重なる不幸に彼女の信仰心も揺るぎがちでした。そんな時、彼女は文学、特に中世騎士物語に興味をひかれ始めたのです。

ドイルの母メアリーは、貧しいながらも自分の先祖はプラントジネット家に繋がる名家の一つだというのが誇りの種でした。この血筋のことは息子のアーサーにも機会あるごとに話していたようです。中世騎士物語のファンタジーの世界に浸ることは、目の前の厳しい現実から、たとえひと時でも逃れることが出来ましたので、読書は母メアリーにとって安息の場になっておりました。

エジンバラ哲学協会

そんな時、一八六三年六月、アーサーが四歳の時、母メアリーは「エジンバラ哲学協会」(Philosophical Institute of Edinburgh)の存在を知って入会致しました。このことが、彼女は

もとより幼いアーサーにとっても文学への目を開く大きな転機になったのでした。この会は、文学や自然科学に興味をもつエジンバラの知的な人々の集まりで、チャールズ・ディケンズが『クリスマス・キャロル』の朗読をしたこともあったようです。そして、アーサーの母メアリー・フォーリーは、この会で多くの知識人と出会い、文学愛好者らの人脈が広がっていったのでございます。

もう、皆様ご想像がつくかと思いますが、アーサーの母メアリー・フォーリーが、ジョン・ヒル・バートンの妹メアリーと出会ったのは、この「エジンバラ哲学協会」だったのです。正確には、ドイルの母メアリー・フォーリーを、メアリー・バートン(一八一九・一九〇九)を含むバートン一家と引き合わせたのは、この会の重鎮の一人であった、医師でエッセイストのジョン・ブラウン博士(一八一〇・一八八二)だっ

たとライセツトは書いております。

当時、メアリー・バートンはスコットランドにおける先駆的な女性教育家、婦人参政権活動家として知られた女性でした。

ドイルとバートンの出会い

さて、リバトン・バンク・ハウスに預けられたドイルが、そこで出会ったのがウイリアム・キニモンド・バートンでした。彼は一八五六年生まれですからドイルより三歳年上です。アーサーがリバトン・バンク・ハウスに預けられた一八六六年当時、アーサーは七歳、ウイリアムは一〇歳でした。

ウイリアムはスコットランドで高名な弁護士で歴史家でもあったジョン・ヒル・バートン（二八〇九・一八八一）の二度目の妻、キャサリンとの間に出来た待望の男子でした。バートンとドイルは出会ってすぐ仲良くなりました。当

時、アーサーには先程申し上げたように、リバトン・バンク・ハウスに預けられる理由がありました。母キャサリンが健在でバートン家にも特に問題がなさそうなか、何故、ウイリアムがリバトン・バンク・ハウスに預けられたのでしょうか。

晩年のメアリー・バートンにインタビューしたセアラ・トゥーリーは、メアリーがはつきり「甥・姪を預かって教育を施した」と書いています。このことについては、時間の関係から割愛させていただきますが、一言だけ申し上げますと、個人的には、どうもキャサリンの精神状態に問題があったのではないかと私は思っております。

さて、メアリー・バートンやウイリアムを通じて、まだ子どもだったアーサーはクレイグ・ハウスのジョン・ヒルの書斎にも出入りするようになりました。そこで多くの本と出会ったの

です。当時のアーサーには難しい本など理解できるはずありませんでしたが、珍しい絵が数多く掲載された本を見ることが、彼の冒険心はかきたてられていったのでした。

ドイルの将来の夢は土木技術者だった

ニューイントン・アカデミーに二年間通った後、九歳になったアーサーはリバトン・バンク・ハウスを去り、イングランド北部ランカシャー州にあるホッダー校に入学致します。

その後、カトリックの名門教育機関、ストニールハースト校に進むのですが、一八七四年、一五歳になったアーサーは最終学年の授業を受ける傍ら、将来の進路を考える時期になりました。ある時、教師に進路を聞かれたアーサーは「ぼくは将来、土木技師(Civil Engineer)になることを考えている」と答えたそうです。学業の成績はまあまあながら、強情な性格で、将来

の可能性を見込めないと思っていた教師は「君はエンジニアになれるかも知れないが、決してシビル(立派な)エンジニアにはなれないだろう」と答えたという逸話が残されております。

“ You may be an engineer, Doyle, but from what I have seen at you, I should think it very unlikely you will be a Civil one.”

一方、一八七四年当時のウイリアムはどうだったのでしょうか、彼は発足したばかりの設計会社「ブラウン・ブラザーズ」に入社して一年が経ち、機械工学、水理学、港湾や橋梁工学の理論を学び、技術者として希望に満ちたスタートを切った時期でした。

アーサーがリバトン・バンク・ハウスを出てホッダー校に入ったとき、メアリー・バートンはアーサーの後の面倒をウイリアムの母であ

るキャサリンに託し、彼女はそれを忠実に守ったのでございます。例えば、アーサーに定期的に手紙を出し、また、彼に経済的負担をかけさせないよう、毎回、手紙の中にはたくさんのお切手を同封して連絡を絶やさないようにしたとライセツトは書いております。

終生の友としてアーサーとも手紙をやりとりしていたウイリアムは、アーサーに土木技師としての仕事の面白さや、やりがい伝えていたのではないでしようか。このことがアーサーの「将来は土木技師になりたい」発言につながったのでありましよう。ただ、アーサーが本当に土木技師となっていたら、今日、世界中で彼の名前が知られていたかどうかは甚だ疑問で、彼が作家になったのは結果的には大正解でありました。

ドイル作品に登場した親子

アーサーの作品には、ジョン・ヒルとウイリアムの親子が実名で登場致します。まずは、父親のジョン・ヒルの方から披露致します。ホームズ・シリーズの一つ《有名な依頼人》がそうです。ホームズの相棒ワトスン医師が名乗った偽名と、彼が持っていた名刺には「ハーフムーン街三六九番地。ヒル・バートン博士」と書かれていたのです。

この作品は「ストランド・マガジン」(一九二五年二月、三月号)に発表されたものです。あらすじはこうです。

ホームズへの依頼内容は、オーストリアの殺人鬼グルーナ男爵の恋の虜になった英雄の娘、ヴァイオレット・ド・メルヴィルの目をさまして欲しいというものでした。ベイカー街のホームズの事務所兼下宿へ来たのは代理人でした

が、彼の話から、依頼人本人は匿名ながらも高名な人物であることは間違いないさそうでした。そこでホームズは、美術品収集家として名高いグルーナ男爵のもとへ、美術品の愛好家という触込みでワトスン医師を送り込むことにしたのです。ワトスンは一夜漬けで東洋美術の知識を仕入れ、「ヒル・バートン博士」と印刷された偽名の名刺と中国陶器の逸品を携えてグルーナ男爵の館へと乗り込みます。

しかし、すぐにワトスンの正体を見破った男爵は、彼に「聖武天皇や奈良の正倉院との関係」について尋ねるなど、立て続けに質問を浴びせて彼を窮地に追い込んでしまっています。万事休すその時、ホームズが絶好のタイミングで現れるという物語です。

この物語は六〇作品中五四番目、アーサー六六歳のときに発表したものです。子どものとき世話になった恩人の名前が晩年の作品に登場

するという、これ一つをみても、彼がいかに生涯にわたってジョン・ヒル博士に深い尊敬と感謝の念を抱いていたかが分かるうというものです。

正倉院や奈良が登場する作品にヒル・バートン博士の名前を登場させたことは、アーサーの深層心理にはウイリアムへの思いがあったのでありましょう。作品が発表された一九二五年当時、ウイリアムは他界して二六年が経っておりましたが、かつて東京帝国大学教授として日本へ赴任した時、彼は日本各地の写真を撮ってはアーサーのもとへ送っていたのでした。

当時、正倉院は、歳末のスス払いの時などには外国人にも内部を公開していたようで、恐らくウイリアムも国の許可を得て内部を見学し、この時に撮った写真や入手した資料の一部をアーサーのもとへ送ったものと思われます。

一方、アーサー初期の作品で「ロンドン・ソ

サエティ」誌（一八八二年五月号）に発表した
「我が家のダービー競馬」には“ウイリアム”
という名前が登場致します。この年、ウイリアムはロンドン衛生保護会の主任技師に就任しておりますが、つぎのような一節です。

「昔、ジャックは、ハザリーの小川で釣った死んだ魚を私にくれたことがあったのを覚えている。私はその魚を、私の宝物の中で一番大切にしまっておいたので、やがて家中に臭いが立ち込め、母がバートンさんに苦情の手紙を書いたつけ。するとバートンさんは、お宅の排水装置は申し分ないと言ったものだ」
というものです。

思い出の地エジンバラを描く

八年後の一八九〇年四月に出版した単行本『ガードルストン商会』では、アーサーは「わ

が友、東京帝国大学ウイリアム・K・バートン教授にこの本を捧ぐ」と献辞を掲げています。当時、アーサーは三一歳。ポーツマス市で開業医の傍ら書き上げたホームズ作品2作目『四つのサイン』が雑誌「リピンコット誌」2月号に掲載された直後でした。何故、この作品がウイリアムに捧げられたものなのでしょうか。その理由は、私は二人の思い出の地、エジンバラの美しい情景が中で描かれていることだと思います。こうです。

「霧はエジンバラ城の威圧的な城壁の上を羽飾りのようにただよい、カールトン・ヒルに立つ未完成の国立記念柱の周りには美しい渦巻きを作っている。広大なプリンス街ガーデンズは緑色を帯びて春のようで、幾つもの噴水が日光を浴びて楽しそうに輝いている」

さて、「ホームズ物語」に見られる日本に関する記述は、ウイリアムから送られた資料が基になっていることは、晩年、アーサー自身が語っております。

Doyle に会った安藤寛一

一九一〇年に島津久賢（ひさよし）ひさたか）男爵の随員員として英国に滞在していた英文学者・安藤寛一はコナン・ドイルに会っております。この時、ドイルがまず語ったのは、一〇年前に東京で亡くなったキニモンド・バートンの事でした。

後年、安藤は著書の中でドイルの言葉として「余の友人にバートンといふあり、余が竹馬の友にして小学、中学、大学を共に同じく卒へし人、工学士となりて貴国に渡り、東京の水道工事を督して功ありきとか。余は氏よりの通信にて日本といふ国の様を、稍（しょう）、知り得た

り」（『コナン・ドイル先生を訪ふ』から）と書いております。

スチブンスン家は灯台一家

ジョン・ヒル・バートンと妻キャサリンの住む屋敷、クレイグ・ハウスには作家や編集者、探検家など多くの客人が訪れました。その中の一人が『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』などで知られるロバート・ルイス・スチブンスン（一八五〇・一八九四）でした。スチブンスンはエジンバラ大学でドイルの先輩にあたり、ドイルより九歳年上です。晩年、サモア島から出したドイルへの手紙で「シャーロック・ホームズの冒険の数々、きわめて独創的、かつ面白く、感服致しました。歯が痛い時に読みたいような文学ですね」と書いています。

ウイリアムはスチブンスンより六歳年下ですが、当然、彼とも面識があったはず。ス

チブンスン家は彼の祖父も父も灯台の建設を専門とする土木技師でした。そこで、ロバートもエジンバラ大学土木工学科へ入学したのですが、どうしても作家になりたくて方便として法律学科へ転科してしまったのです。

余談ながら、ウイリアムが来日する一九年前の一八六八年、明治初期の横浜において、上下水道敷設の計画、鉄橋の架設、港の建設など横浜のまちづくりに多大な貢献をしたのがアバディーン生まれのリチャード・H・ブラントン（一八四一—一九〇一）でした。

ブラントンは「日本の灯台(Lighthouse)の父」として知られておりますが、彼は来日する前、エジンバラのチブンスン兄弟のもとで灯台の実務経験を積んでおります。このように、ブラントンははじめコナン・ドイル、チブンスン、ブラントンなど、スコットランドは文学・工学を問わず、各方面からも優秀な人材を生み出し

たところといえるのではないのでしょうか。

衛生工学者としてばかりでなく、ウイリアムは写真の腕もプロ級であったことは、よく知られております。この影響は「ホームズ物語」にも見られるのです。

「ホームズ物語」にみる写真

一九二六年に発表した《ライオンのたてがみ》事件で、ホームズは遺体についた傷の拡大写真を警察のバードル警部に見せ「こういう時に、ぼくがとる方法がこれです」と言っています。このほか写真は、一八八七年の事件《赤毛組》や、一八八九年の《ブナ屋敷》にも登場します。これらの発想もウイリアムの影響が大きかったと思います。

最後に、二人が出会った「リバトン・バンク・ハウス」のその後について、簡単にふれておき

たいと思います。

メアリー・バートンが一八四四年から一九〇九年まで六五年間住んだ「リバトン・バンク・ハウス」は彼女の没後も八四年間、一九九三年まで住居として使われました。その後、一帯はキャメロン・トール・ショッピング・センター (Cameron Toll Shopping Centre) 建設計画の中に組み込まれ、建物は次第に忘れ去られていったのです。

建物は一時、解体の危機もありましたが、紆余曲折の末、現在はダニーデン・スクール (Dunedin School) の教育施設として利用されております。

現在、ダニーデン・スクールには一一歳から一八歳まで、二一人の生徒が寮生活を行いながら学んでおります。彼らは皆、心の問題や学習の問題があつて、一般の学校で教育を受ける

のが難しい子どもたちばかりです。学校側は四人のスタッフで、子どもたちのそれぞれの能力に応じてきめ細かなケアを行いながら教育をするという、スコットランドでも非常にユニークな学校となっております。

メアリー・バートンは家庭的に不幸であつたアーサー少年をリバトン・バンク・ハウスに受け入れ、そこで出会つたウィリアムと彼は生涯の友達になりました。

かつてのリバトン・バンク・ハウスがダニーデン・スクールとなつた今、ここで学ぶ二一人の子どもたちにもバルトンとドイルのような、素敵な出会いがあることを祈るばかりです。

簡単なお話になつてしまいましたが、バートンとドイルの出会い、そして彼らを支えた人たちについてご紹介させて頂きました。ご清聴有難うございました。

二〇二〇年八月二十日開催
東京都港区白金台五・二〇・二
台北駐日経済文化代表処



コロナ禍の中での講演姿

【講演に登場する人名・作品名・施設名 登場順】
・アーサー・コナン・ドイル(ACD、一八五九、一九三〇)
ホームズ・シリーズの作者。W・K・バートンとは終生の親友。
・チャールズ・ドイル(一八三二-一八九三)
アーサーの父。アルコール依存症で精神病院入院。病院にて没する。
・メアリー・フォーリー・ドイル(一八三七-一九二〇)
アーサーの母。彼をRBHの家主メアリー・バートンに預けた。
・メアリー・バートン(一八一九-一九〇九)
ジョン・ヒルの妹。婦人参政権運動指導者。先駆的教育家。ACDを預かる。
・ウイリアム(W)・キンモンド(K)・バートン(一八五六-一八九九)
帝国大学工科大学衛生工学教師。ACDの竹馬の友。

・ジョン(J)・ヒル(H)・バートン(一八〇九・一八八一)

W・K・バートンの父。スコットランドの高名な弁護士、歴史家。

・キャサリン・バートン(一八二七・一八九八)

JHB二度目の妻。ウイリアムの実母。JHBの親友コスモ・イネスの娘。

・ホッダー校

ニューイントン・アカデミーのあと、アーサーは九歳から一一歳までの二年間ここで学んだ。

・ストニーハースト校

カトリック系の名門教育機関。アーサーは一一歳から一五歳までの五年間をここで学んだ。

・《高名な依頼人》

月刊誌「ストランド・マガジン」(一九二五年二月・三月号)に発表。 Doyle六六歳のときの作品。

・「我が家のダービー競馬」

「ロンドン・ソサエティ」(一八八に年五月号)に発表。 Doyle二三歳のときの作品。

・『ガードルストン商会』

一八八九年四月一五日刊行、ロンドンのチャトラー・アンド・ウィンダス社から出版。

・安藤寛一(一八七八・一九二四)

Doyleに会った日本人英文学者。帰国後、大阪高商(現、大阪市立大)教授となった。

・ロバート・ルイス・スチブンスン(一八五〇・一八九四)

英国の作家、『ジキル博士とハイド氏』などの作品がある。

・リチャード・ヘンリー・ブラントン(一八四一・一九〇二)

「日本の灯台の父」。横浜まちづくりの父とも称される。

・《ライオンのたてがみ》

「ストランド・マガジン」(一九二六年一二月号)に発表。捜査に写真利用の記述あり。

・リバトン・バンク・ハウス(RBH)

メアリー・バートンの家。一八六六年から2年間、ACDはこの家で暮らした。

・ダニーデン・スクール

かつてのRBHは現在ダニーデン・スクール(Dunedin School)の施設として使われ二人の子どもが学んでいる。

【田中喜芳プロフィール】

(Dr. TANAKA Kiyoshi, JSHC, BSI.)

一九八七年、世界で最も権威あるホームズ研究団体、米国・ベイカー・ストリート・イレギュラーズ(BSI)に、故・長沼弘毅博士に次ぎ二人目の日本人会員として入会を認められる。

現在、ロンドン・シャーロック・ホームズ会をはじめ各国三四の研究団体に会員・名誉会員として在籍する。日本推理作家協会会員。日本病跡学会会員。鎌倉ペンクラブ会員。人間行動学博士(P.h.D)。画家、ホームズ・グッズ・コレクターでもある。

著書・翻訳書多数。最新刊は『シャーロック・ホームズ トリビアの舞踏会』(シンコミュージック・エンタテインメント)。本書の中でも第六〇章でW・K・バートン、ジョン・ヒル・バートン、メアリー・バートンについて紹介している。